

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24530874

研究課題名(和文) 里親養育における支援システムの実証的研究

研究課題名(英文) An empirical study on the support system of foster care

研究代表者

松崎 佳子 (MATSUZAKI, YOSHIKO)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：30404049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：里親養育への支援のあり方を検討するために、里親登録時と現在の里親のコンピテンシーの変化について、現在里子を養育中の里親への質問調査を行った。また、食事場面の観察調査を行い分析した。その結果、里親は、養育体験の積み重ねの中で里親像を変化させていること、成長していること、自分自身への新たな気づきや振り返りなどがあることが示唆された。また、養育、親族、養子縁組の里親像は、養育の目的により異なり、それぞれの特徴が示された。これらにより里親の養育体験のプロセスや里親の種類に添った支援のあり方が必要であると思料された。

研究成果の概要(英文)： To examine measures of support towards foster parent, questionnaire study on their change of competencies between the point of registration and present were carried out to participants providing a foster care. Then, observational study was conducted within the context of eating meals. The result suggests that accumulating fostering experience promoted to develop, change perspectives on foster parent and enhance one's self-knowledge and self-reflection. According to different aims of fostering, perspectives on foster care, kinship care and adoption varied. This study illustrates each characteristic and shows the necessity of supporting them in consideration with different types and process of fostering experience.

研究分野：臨床心理学

キーワード：里親支援 コンピテンシー 社会的養護 人材養成

1. 研究開始当初の背景

(1)わが国の児童虐待相談件数は増加の一途をたどり、平成 22 年度 5 万件強となった。虐待や親の病気など家族と暮らせない子どもたちの受け入れの場として、施設や里親制度がある。しかし、わが国の里親等委託率は、平成 21 年度で 1 割であり、7 割強である先進諸外国に比べ非常に低い状況である。国も平成 23 年 3 月里親委託優先のガイドラインを示し、7 月「社会的養護の将来像」において施設の小規模化や里親委託率を 3 割強にする方針を出している。

(2) 里親養育は子どもとの愛着関係の再形成や地域の一員として育つなど重要な役割を担うものであるが、社会的養護を要する子どもの半数は被虐待経験を有し、愛着障害や発達障害などさまざまな問題を抱えている。子ども達の養育は、0 からのスタートではなく、マイナスからの関係性・愛着の再形成である。従って、里親には、家庭養育者としての専門性、養育技術等が必要である。しかし、現実的には、里親個人の資質に頼る養育となっており、研修や支援システムは非常に不十分な状況にある。

2. 研究の目的

本研究は、被虐待など社会的養護を要する子どもへの家庭養育・パーマネントケアである里親養育について、現状を把握しつつ養育の質についての調査研究を行うものである。さらに、里親の養育の質を高めるためには、どのような支援が求められるのか、支援システムのあり方について、臨床心理学的に実証研究を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)社会的養護における里親のコンピテンシー（力量）に関する調査

九州 2 県に居住で現在子どもを養育中の全里親を対象に児童相談所を通して調査を依頼。回答は、研究者あて無記名で郵送された。対象者 257 名中 138 名から回答があり、回収率は 53.8%であった。調査期間は平成 25 年 12 月～平成 26 年 2 月である。

調査項目

・基本項目：性別、年齢、里親歴、実子の有無、里親会への入会、養育・親族・養子縁組の種類、里親になったの気づきの有無

・調査項目：宮島らの先行研究や YG 性格検査を基に以下の項目を作成した。A 人権への理解と配慮 4 項目、B 社会的養護の理解 4 項目、C 安定した環境 12 項目、D 子どもの発育・環境の理解 12 項目、E テクニカルスキル 16 項目、F ヒューマンスキル（個人の特性）15 項目、計 63 項目

・ストレスコーピング TAC-24(神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・板野, 1995)を使用

・自由記述

SPSS を用いて統計的分析を行った。

(2)食事場面が伝える里親像に関する観察調査

食事場面の参与観察を行い、心理学的エスノグラフィーの手法で行為・発話の詳細な記述データを収集、分析した。対象は 2 軒のファミリーホームで、調査時期は平成 25 年 7 月である。

(3)里親のコンピテンシーについて、児童相談所の立場から考える

里親委託率が高く、豊富な経験を有している児童相談所の里親支援担当者から座談会や視察を通して、里親のコンピテンシーについて調査した。

(4)里親養育がスタンダードになっている欧州において、家庭的養育者の人材養成を行っている国際 NGO である SOS 子どもの村インターナショナルから講師を招聘し、行政、里親関係者を対象とした九州フォーラムと里親研修を実施した。

(5)倫理的配慮：個人が特定されないように統計的処理及び記述を行うとともに、協力者の理解と了承を得た。本研究は、九州大学大学院人間環境学府臨床心理学講座倫理委員会の審議承認を得ている。

4. 研究成果

(1)社会的養護における里親のコンピテンシー（力量）に関する調査

里親の種類では養育里親 92 名(66.7%)、親族里親 21 名(15.2%)、ファミリーホーム 16 名(11.6%)、養子縁組里親 8 名(5.8%)、専門里親 1 名(0.7%)であった。

実子のある里親は 82 名(60.7%)もたない里親は 53 名(39.3%)であった。

里親会には 97 名が入会しており、73.5%であった。

各調査項目群での登録時と現在の平均値は全てに有意差があった。(p < .001)

各下位項目での平均値の差				
	M	SD	t 値	自由度
登録時A合計 - 現在A合計	-1.38	2.123	-7.47	132 ***
登録時B合計 - 現在B合計	-2.23	4.316	-5.95	132 ***
登録時C合計 - 現在C合計	-1.71	4.087	-4.60	120 ***
登録時D合計 - 現在D合計	-4.39	5.832	-8.05	113 ***
登録時E合計 - 現在E合計	-3.73	5.753	-7.31	126 ***
登録時F合計 - 現在F合計	0.21	2.312	1.02	129 ***

*** p<.001

調査下位項目についてみると、A,B,D,E については、全項目、C については、12 項目中 9 項目有意差があったが、F(性格特性)については 15 項目中 5 項目であり様相の違いが認められた。

登録時 A ~ E 質問下位項目および登録時 F 質問下位項目、現在 A ~ E 質問下位項目および現在 F 質問下位項目を最尤法による因子分析を行った。その結果

a)登録時の A ~ E 項目は次の 3 因子を抽出した。

均値、×は平均値が最も低かったものである。平均値が3ポイント以内は同格とした。

里親になっての気づきについては、大いにある42名(35.0%)、ある46名(38.3%)、少しある16名(13.3%)、ほとんどない14(11.7%)、ない2名(1.7%)と86.6%が新たな気づき、再認識の体験を持っていた。自由記述のKJ法分析では、「自己理解(ポジティブ、ネガティブ、怒りの側面、自身への気づき)」「自分の過去の振り返り」「自分自身の成長」「里子を育てること(愛着形成、実親との関係性、真実告知、里子への感謝)」「子育て(楽しさ、子どもが好き、具体的な対応、体力のなさ、うまいかなさ)」「地域・制度へのなどのネットワーク」であった。

まとめ

里親にとってその養育体験は里親に変化をもたらす。里親養育に必要な枠組みを整えて、開始された里親養育は、スキルから愛着へ、愛着から子どもを理解したいという欲求に変化する。さらに、里親自身のそだちへの振り返りが始まり、新たな自分への気づきをもたらしている。これらの変容は里親に人としての成長を促していくことがわかった。養育を続けていく中で生じる様々なストレスや、人生で生じるストレスに対して、里親は肯定的に捉え、計画的に乗り切っていくとする態度で対処している。また、ストレスに対する情緒的な繊細さは共感性として活用され、のんきさと攻撃性は養育を続けていくエネルギーとなる元気さとして活用されており、ストレスコーピングは良好なものであった。里親の種類による里親像は養育の目的によって異なり、それぞれの特徴が示唆された。本調査によって浮かび上がってきた里親像が語るさまざまな姿は里親のコンピテンシーを探る手がかりになると思われた。養育を進めていくなかで培われるもの、もともと持ち合わせているものを上手く活用しているものなど、社会的養護に関わり続けることでもたらされる里親の変容は、里親が里親となっていくプロセスの中で多く見出され、里親の成長と理解された。

(2) 食事場面が伝える里親像に関する観察調査

調査本研究の目的である質的研究を考慮し、現場理解の手法であるエスノグラフィを分析方法とし、以下の手順で分析した。ア)ビジュアルデータを逐語に起こす。イ)ビデオを視聴し、調査項目ごとに感想をまとめる。ウ)調査項目について仮説を立てる。エ)ビジュアルデータと逐語録を参照しながら、調査項目に該当する場面に注目し、社会的文脈のなかで分析し、仮説を検証する。

以下の仮説を立てた。

a どのような里親さんか? : 人柄や考え方の項目は「里親像」として仮説を立てる。家族F1:情緒的で明るくおおらかな里親は子ども

とのほどよい距離感をはかり、子どもの気持ちを察することを大切に徹しくしない。家族F2:のびのびとして保護的で、社会性や生活感を意識した関わりに努め、メリハリを持って、子どもの間に介入していく。

b どのような家庭か? : 子育てのポリシーの項目は「子育てポリシー」として仮説を立てる。F1:子どもの子どもを尊重し、自主性を育み、自然さ(オープン)を大切にする。他方、切り替えがないF2:子どもを尊重し、自己判断力を育み、文化的機会や教育を与える。他方、過保護になる。

c 子ども同士の関係:F1:自然(オープン)な関係でユーモアと笑いのある関係性。里親と里子の愛着が形成される。他方、子どもたちの関係はまとまらない。F2:兄弟のような関係性で豊かな相互作用が起こる。他方、里親からの操作的な関係性でもある。

d カメラに対する反応の回数それぞれの家庭の雰囲気の違いからF2よりF1が多い。

結果

ビジュアルデータと逐語録の分析によりファミリーホームF1、F2共に調査項目仮説a~dは検証された。

調査項目仮説で検証されたF1、F2の示した里親像のすべてが里親のコンピテンシーと考えられる。F1は「情緒的」「明るい」「おおらか」「子どもとのほどよい距離感」「察する」「見守る」「頼もしさ」「エネルギー」「厳しくしない」F2は「のびのび」「保護的」「メリハリ」「子どもの間へ介入」「社会性」「生活感」である。本研究(1)で抽出された現在の里親像としての<子どもの理解><社交性><情緒的な不安定(感受性の豊かさ)>と重なるものが本データの分析からも認められた。また、養育里親・専門里親・ファミリーホームを一群と為すグループは環境に配慮することを重要とし、地域や里親仲間と交流していく社会性を身につけ、自らの健康に気遣い、社会的養護であることを意識し、眠れないこともあるほどに真摯に養育に取り組んでいる姿が見えてきている。これらの結果と本研究の知見は重なり合うものが多くあるといえる。ファミリーホームの里親は豊かな力量をもち、子どもを尊重する態度を根幹に据えて、それぞれの家族に馴染む、カラーを築いていた。どちらのファミリーホームも子どもたちの生き活きとした姿がそこにあった。

今回はベテランの里親のファミリーホームを対象とした。また、里親の経歴等は考慮していない。今後は若手の里親のいるファミリーホームについての調査や、里親の経歴や子どもたちの生育歴を考慮した調査が必要であろう。

(3) 里親のコンピテンシーについて児童相談所の立場から考える

以下の意見が共通して出された。

里親登録までの面接、基本調査、認定研修、

面接、家庭訪問、施設実習と、このプロセスに意味があると思う。このプロセスの中で、アポイントが取れない人は登録から落ちていくことが多い。登録里親となっていく人は、児相が求めている里親像を理解して、自分の里親になる思いと統合していくようである。「(里親を)やりたい、やりたい。(子どもを)ほしい、ほしい」の方は難しいところがあるように思う。社会的養護であることを理解し、委託される子どもに対してこだわりがなくなっていく方は、その後の里親としての成長が大きい。例えば、男の子でも女の子でも構わない、年齢も問わなくなる…。

柔軟性、おおらかさ、ざっくり感は重要と考える。うまくいっている里親は小さいことを気にしない、こんなものかなと前向きに受け止められるポジティブさがある。家庭が雑然としていてもおおらかに子どもと付き合う態度、子どもと同じ目線になれること、生真面目さ、突き詰めない態度、里子の安心感を意識できること、自分の強みや弱みをわかっていることなどもコンピテンシーとして浮かんでくる。また、実子の子育てとは違うことに気付かれると大きく成長される。約束や時間の作り方など社会性も重要である。

(4)九州フォーラム「家庭的養護を支える人材養成」は、SOS 子どもの村インターナショナルの講師の基調講演、里親と児童養護施設長のシンポジウムとして、企画実施され、83名の参加を得た。里親研修は「子どもの忠誠葛藤」について実施した。

(5)まとめと今後の課題

里親の資質・力量(コンピテンシー)について、登録時と現在の変化や、里親養育の質を高めるための支援のあり方について検討するために、九州2県の全里親に対してアンケート調査を実施し、分析検討した。このアンケート調査を踏まえて、ファミリーホームでの食事場面の観察調査により里親のコンピテンシーの質的研究を行った。また、里親支援の行政機関である児童相談所里親担当者から見た里親のコンピテンシーについて座談会や視察調査を通して聴取した。

里親は、登録時から現在までの養育体験の積み重ねの中で、里親像を変化させていることが示された。登録時の里親は、子育てへの理解や社会的養護への理解、家庭内協力を求めている。また、社交性や健康に気づきながら、里親養育を行っていかうとする。このような里親の決意は、周りの人が自分の養育をどのように受け止めているかを確かめてしまうといった対人的な過敏さを強め神経質な傾向をもたらしている。社会的養護の子どもを育てるという使命感から、しっかり育てることが目標となり、「子育てをする」ことに気持ちが置かれていたと思われる。現在の里親像として、子どもの理解、社交性、情緒的な不安定(感受性の豊かさでもある)が

認められた。養育体験の進んだ現在は、子どもとの生々しく、手応えのあるつきあいから、「子ども」に喜び、「子ども」に泣く日々を過ごすようになっている。そして、里親の中に、「子どもを理解したい」という欲求が生まれる。また養育の日々から、「自分自身のそだちを振り返り」始めている。この変化は、里子との心理的距離が近づいたこと、里親は里親としての心理的成長が促されていることを示唆している。さらに、里親は周囲との友好的な関係を築くことに、積極的に社交性を持ち合わせていることもわかった。反面、他者からの評価に過敏で神経質な傾向を持っており、里親養育が進むと情緒的な不安定に変わっていく。この情緒的不安定は、里親の豊かな感受性を示してもおり、支援や活用次第では子育てに有効となる傾向でもあると思われる。

養育・親族・養子縁組など里親の種類別による里親像は、養育の目的によって異なり、それぞれの特徴が示唆された。養育里親(専門里親・ファミリーホームを含む)は、環境に配慮することを重要とし、地域や里親仲間と交流していく社会性を身につけ、自らの健康に気遣い、社会的養護であることを意識し、眠れないこともあるほどに真摯に養育に取り組んでいる姿が見えてきている。

養育を続けていく中で生じる様々なストレスや、人生で生じるストレスに対して、里親は肯定的に捉え、計画的に乗り切っていこうとする態度で対処している。また、ストレスに対する情緒的な繊細さは共感性として活用され、のんきさと攻撃性は養育を続けていくエネルギーとなる元気さとして活用されており、ストレスコーピングは良好なものであった。

本調査によって浮かび上がってきた里親像が語るさまざまな姿は、里親のコンピテンシーを探る手がかりになると思われた。養育を進めていくなかで培われるもの、もともと持ち合わせているものを上手く活用しているものなど、社会的養護に関わり続けることでもたらされる里親の変容は、里親が里親となっていくプロセスの中で多く見出され、里親の成長と理解された。また、里親になって自分自身について、新たに気づいたことや再認識したことがあるかについては、86.6%の方があると回答しており、自由記載では、里親自身についての自己理解や振り返り、自身の成長などが記述されていた。

これらの里親像や、養育体験を通しての変容に応じたその時々多様な支援のあり方が里親の成長を促し、自己覚知につながるものであろうと考えられる。

また、質的研究である食事場面の分析においても「情緒的」「明るい」「おおらか」「子どもとのほどよい距離感」「察する」「見守る」「頼もしさ」「エネルギー」「厳しくしない」「保護的」「メリハリ」「社会性」「生活感」などの里親像が示され、調査研究や座談

会で示された里親像と重なり合うものが多く認められた。

児童相談所の里親支援担当者からは、里親のコンピテンシーとして、「社会性」「普通」「ざっくり」「柔軟性」「成長される人」など多くのキーワードが支援体験と共に出され、「いろいろ揺れながらもきちんと伝える、伝えられる」「求められる里親像(社会的養護)を理解して、自分の里親になる思いと統合していく」など里親の変容も語られた。

九州フォーラムや里親研修においても、家庭養育者(里親)の資質として、感性の豊かなコミュニケーションができるスタイルを持っていて、子ども達のいろいろなニーズに適正に反応していくことができる能力やネットワークを作っていくソーシャルスキル、葛藤と危機のマネジメント、セルフマネジメントの重要性が示唆された。

今回浮かび上がってきた里親の種類により異なる里親像や養育体験を得て変容する里親のコンピテンシー、成長などプロセスに応じた多様な支援を構築していくことが必要であると思料された。

今後の課題として、今回の里親調査は、現在から登録時を回想しての記載であった点にバイアスがかかった可能性が考えられ、さらに精査していくことが必要であろう。

<引用文献>

山本裕子「社会的養護の国際的考え方」教育と医学第59巻8号、p18~25,2011.8

松崎佳子「社会的養護に携わる人材の養成はどうあるべきか」教育と医学第59巻8号、p26~33,2011.8

松崎佳子「社会的養護における愛着の喪失予防と再形成を図る里親委託時支援システムの開発研究」主任研究者 挑戦的萌芽研究平成22年度~23年度

庄司順一他「子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究」平成19年2月

庄司順一他「施設から里親への円滑な移行と里親支援のあり方に関する調査研究」こども未来財団 平成21年2月

宮島清(2010)フォーラム「新しい絆」里親にどんな力が求められるの?

伊藤嘉余子(2014)「里親の成熟プロセスに影響を及ぼす里親支援」『子ども家庭福祉学 第14号』p13~p23

5. 主な発表論文等

(〔雑誌論文〕(計2件))

松崎佳子、社会的養護を担う里親が直面していること、里親と子ども Vol.8、2013.10、P39-45、査読無、DOI: ISBN,978/4/7503/3888/0

坂本雅子、松崎佳子、国連子どもの代替養育に関するガイドラインと子どもの村福岡の取り組み、子どもの虐待とネグレクト、Vol.14.No3 通巻36号、査読無、

2012.12,321-327,DOI:ISSN,1345/1839

(学会発表)(計5件)

入瀨直美、松崎佳子、香野有咲、首藤里菜、中嶋美咲、成松菜美、社会的養護における里親のコンピテンシーに関する調査研究(1)、第15回日本子ども家庭福祉学会全国大会、2014年6月7日、「新潟県立大学(新潟県・新潟市)」

松崎佳子、河野洋子、宮島清、家庭養護の推進に向けて、支援システムのあり方を考える、日本子どもの虐待防止学会第19回学術集会信州大会、2013年12月14日、「信州大学松本キャンパス(長野県・松本市)」

松崎佳子、社会的養護を要する子どもの支援の現状と課題、日本子どもの虐待防止学会第18回学術集会高知りょうま大会、2012年12月7日、「高知県立大学(高知県・高知市)」

入瀨直美、松崎佳子、社会的養護における愛着の喪失予防と再形成を図る里親委託支援システム、日本子どもの虐待防止学会第18回学術集会高知りょうま大会、2012年12月7日、「高知県立大学(高知県・高知市)」

松崎佳子、社会的養護について、国連子どもの代替養育と子どもの村福岡の活動を通して考える、第53回日本児童青年精神医学会総会、2012年11月2日、「都市センターホテル(東京都・新宿区)」

6. 研究組織

(1)研究代表者

松崎 佳子(MATSUZAKI,Yoshiko)

九州大学・人間・環境学研究所(大学院)・教授

研究者番号:30404049

(2)研究分担者

大場 信恵(OBA,Nobue)

九州大学・人間・環境学研究所(大学院)・教授

研究者番号:00403931

(3)研究分担者

増田 健太郎(MASUDA,Kentarou)

九州大学・人間・環境学研究所(大学院)・教授

研究者番号:70389229

(4)研究分担者(平成24~25年度)

山本 裕子(YAMAMOTO,Yuko)

西南学院大学・人間科学部・教授

研究者番号:70352200

(3)連携研究者

入瀨 直美(IRIHAMA,Naomi)

西南学院大学・学生相談室・常勤カウンセラー

研究者番号:20728448